り「獨立」であつた。强者に對する立派な反抗の結晶であつた。

句としての反抗は、かうして兎も角も句としての獨立を得た。俳句たる立派な生命を掴み、十七字詩てふ確固たる詩形に生きるを得たに相違ないが、宗鑑、守武、貞德と次第に移りつゝ行く間に、此の短かい詩形に生きんとする壇上にも、また絶えず「虐げ」と「自由」との要求が、互に緊張し、擴大した。而かもその「虐げ」や「自由」やが極めて偏狹且つ不徹底のものであつたから、一面には多少の高上を促さぬでもなかつたが、一面には寧ろ破壞的傾向を帶びつゝ流れて行つた。

一人の偉人が革命の炬火を提げて立つのはまさに此の當時である。

彼は天の使命によつて如上偏狹且つ不徹底な「虐げ」や「自由」やを根底から打破すると同時に、更に絶大の偉力と權威とによつて、明白にして然かも公平なる「虐げ」と「自由」との徹底を俳句の上に投じ斯くして遂に俳壇に新生面を拓いた。その「虐げ」その「自由」は決して他の反抗、他の侵蝕を許さぬまでに强く大きなものであつた。偉人とは即ち芭蕉である。

（中）

自分が前に書いた、公平にして且つ明白なる「虐げ」と「自由」と云ふ事に就いて、ある俳友はかう云ふた。成程自由と云ふものゝ上には公平もあり、明白もあるであらう。公平なる自由、明白なる自由の

あるに相違なく、また自由が公平でなく明白でない以上、其の自由は既に自由の境地を離れて、自棄とか放縱とか、疎懶とかに流れねばならぬ。この點は何人も首肯するところであらうと思ふが、「虐げ」と云ふものに果して公平且つ明白なる「虐げ」が存在し得るものであらうか、「自由」は純に近いが、「虐げ」は純に遠い。純、誠實からかけ隔つた、寧ろ「個」の極端なる象徴にとゞまつた「虐げ」に、そも〳〵何の公平があらう、そも〳〵また何の明白があらう、これはちと受取りにくい議論である、と。

一應は尤もな詰問であるが、自分の云ふ公平且つ明白なる「虐げ」とは、さうした表面の意味からでなく、今少し深味のあるものでなければならぬ。それは人間の意志や感情の上に働く「虐げ」とは全然異つた性質のものであつて、一言にして云はゞ自然の「虐げ」のそれである。

雪は地上の凡てのものを埋めねば置かぬ。雷はまた下界の凡のものをして震愕させねば歇まぬ。けれどもこの自然の「虐げ」はやがてまた自然の「自由」を生み、自然の「幸福」を持來すに相違ない。自分はさう云ふ意味の下に「虐げ」と「自由」とを覓めたい。

此頃坊間に流行する縮冊と云ふ事も、狹い意義から云へば、矢張一種の「虐げ」である。大きな本が小さくなり、大きな文字が小さくされて作られると云ふ事は、其書冊にとつて確かに「虐げ」であるに相違

ないが、彼等はかうした手段の下に、一度賣れとまつて葬られやうとしたものまでが、復活の「自由」と「生命」とを得ると云ふ點に於て書冊それ自身としては多大の幸福を感ぜねばならぬと思ふ。

勿論かうした例はいくらもある。卑近なそして淺薄な事例であるかも知れぬが、自分は何處までも「虐げ」の上にも公平はあり、明白はあると信ずる。自然の「虐げ」と「自由」とはまた必ず公平にして且明白なるものでなければならぬと考へる。

折角連歌から獨立し得た俳句が天和の末期に至るまで、寧ろ破壞的傾向を帶びつゝ流れたと云ふ事も、極めて不自然な、そしてまた極めて不徹底な「虐げ」と「自由」とを覓めつゝ推移したからの事であつた。畢竟は「個」と云ふものにのみ動いたからの結果である。俳聖芭蕉と雖も、敢て自分の手から俳句の上に「虐げ」と「自由」とを投げたと云ふ次第では決してない。彼はこの自然の「虐げ」と「自由」との上に俳句なる詩形を致へて、その復活を憧憬し、更に其復活に大なる力を加へたに過ぎぬのであるが、不徹底且つ不自然な「虐げ」と「自由」とを根底から打破し去つて、公平に且明白に自然の「虐げ」と「自由」とを迎へ、これに準據して確實に俳句を律し得たと云ふところに彼の俳聖たる價値は充分に認められる。

由來俳句が十七字に限られると云ふ事も、よしやそれが詩形の獨立から來た自然の運命であるにしたところで、散文や長歌に比したら、

大なる「虐げ」であらねばならぬ。宇宙の森羅萬象を十七字の中に包容せしめねばならぬと云ふ事は極めて困難な仕事である。此「虐げ」に準據した法則、芭蕉が定めた法則にもまた隨分窮屈なものがないではないが、それは只この至難の業を完全に成就すべき機械を設けたに過ぎぬのであつて、句の法則は、句の「虐げ」に準據したものとは云へ、一面より云はゞ其「虐げ」に對して「自由」を覓むべき一種の武器である。一口に云つて見れば毒をもつて毒を制するが如きものである。其尤も著しき「自由」の要求はてには解放と、俗語の混用とであらう。十七字の窮屈な範圍に「虐げ」られ、切字其他あらゆる法則に跼蹐せる俳句が、現代に至るまで同じ形式の下に廣く流布したと云ふものは、畢竟このてにはの解放と、俗語の混用との二つの「自由」が許されてあつた爲めではなからうか。

そしてまた芭蕉は隨分句の法則を重んじ、句の放慢を誡め、季題、切字の上にもまた多大の研究を傾けながら、人の切字を問ふに答へては、「十七字中切字ならざるなし」と斷言し、更に俳諧の眞隨は自我精神の自然にあると信じて居た。故に門人晩山に與へた書翰にもかうした事が書かれて居る。

俳諧御熱心の由先は珍重、物識りにならんよりは、心の俳諧肝要に御座候、句は澤山に御座候へ共、心法を守る人は稀なるものにて候季寄の御不審御尤に候、愚老は此事に疎く候まゝ、考あとより申可

入候「増山の井」御用ゐ可然候

晩山が季寄不審の如きに對しても、芭蕉は「此事に疎く」と逃げて、只心法を守れと諭して居る。則ち句の法則は今究むるに及ばず、專ら精神の自然に句を養へと敎へた。この一事が既に彼芭蕉の偉大なる人格の發露であつて、句に與へられたる自然の「虐げ」に對しては、何處までも、また自然の「自由」を覓めなければならぬ。そして何處までも其あらゆる「虐げ」に打勝つて、十七字中に名殘なく、宇宙の森羅萬象を收め得ねばならぬ。區々たる人爲の法則の如きは第二の問題である。芭蕉は常にかうした心持を以て句に對した。

一聲の江に横たふや時鳥

の句を沾德に示して、句作の是非を問ふたところが、沾德は、

時鳥聲横たふや水の上

とした方がよいと云つた。けれども芭蕉はなほ孰れを可とすべきかに思ひ煩つた揚句、これを門人に諮つたところが、門人の多くは、改作の句を可なりとしたので、芭蕉もこれに從つたと云ふ話もあるが、畢竟はこれまた自然の「自由」から生れた句に變化を見ぬ限り、後輩の沾德が字句の修整を加へたところで、決して句の精神を損ふものでな

いと信じて、其添削に甘んじた次第である。

（下）

俳聖芭蕉は句の上に與へられた「慘虐」と「自由」との間に句の生命を捉へやうとした。故に彼は宇宙の萬象が彼の肺腑に透徹せぬ限り強いて句を作らうともせねば、またさうした無理な句に生き樣とも思はなかつた。彼は思索の自然を竟むると同時に、句法の上からもまたこの自然を旨とした。近日珍書會と云ふ會から發梓された落柿舍遺稿を見ると、かうした事が書れてゐる。

唐崎の松は花より朧にて、
伏見の作者にて留の難あり、其角曰にては「哉」に通ふ。是故に哉



留の發句にて留め第三を嫌ふ。「哉」と云へば句切過れば、にてとは侍ることなり。呂丸曰にて留の事は其角が解あり、又是は第三の句なり、いかで發句とはなし給ふや。去來曰是は即興偶感にて發句たること疑ひなし。第三は句案にわたる、若し句案に至らば第三等に下らん。先師曰去來が辯皆理屈なり、我は只花より松の朧にて面白かりしのみとなり。

云ふまでもなく先師とは芭蕉の事であつた。かく切字に就いて門弟等の物議紛々たる中に超然として「只花より松の朧にて面白かりしのみ」と嘯いたと云ふものは、敢て彼が誇張でもなければ、自負でもない、只彼が唐崎の松の朧々と霞んだ樣を見て「あの花よりもかばかり

松の朧なるがおかしきものかと歎賞の餘り、不徹底な「虐げ」と見るべき切字の法則を「自由」に扱つたものである。それと共に彼がさうした面目を覗ふべきは、彼の臨終の刹那であらう。彼は俳句と云ふものゝ上に何等の執着をもつて居なかつた。心にもない辭世によつて、彼が俳人たる印象をとゞめやうともしなかつた。彼は臨終前三日の作、

「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」

に彼が句作との別れを告げたに過ぎなかつた。

此點に至ると、其角や、嵐雪やは到底芭蕉に及ぶべくはない。其角はその人格如何は別として、才人であるだけに、あらゆる事物の上に「自由」を望んだが、それは芭蕉の如く眞摯なものではなかつた。或場合には放縱に流れ、或場合には常規を逸した。句上にもまた隨分無理な「慘虐」を加へ、無理な「自由」を欲した。かうした傾向は江戸座の俳調をして遂に技巧に奔らしめ、俳句の眞生命から次第〳〵に遠ざからしめたと云ふことも、實に其角が餘りに其才を恃んで、自然の「虐げ」と「自由」とを個性化したにもよるであらう。

其後とても蕪村とか一茶とか、たま〳〵芭蕉の顰に倣ふて、各自家の見地から「自然」を仰ぎ、そして其間から「自由」を覓めた者もないでもないが俳調に一家の鑄型を据えて、之に準據してしまつたから折角さうした二三者の覺醒も、其人の死と共に廣く大に流布する事なしに、江戸座の俳調が獨り天下を跋扈しつゝ、而も墮落から墮落へと

向つて推移して行つた。

人間何が六ヶ敷いと云つて、鑄型に囚はれる事なく生命を持續する程六ヶ敷しいものはない。自分では何處までも自由に、且つ廣く解放しつゝ進む覺悟で事物に臨み、また其事物を進捗せしむる自信があるにしても、いつの間にか鑄型に囚はれて拔差のならぬやうになる事は凡ての職業、凡ての階級に免れぬ天賦の弱點であるが、藝術家は殊にさうした運命をもつて生れて來るものゝやうに思はれる。

文章にせよ、詩歌にせよ、俳句にせよ、獨創の見地によつて築かれた鑄型、新らしい生命もそこに得られゝば、强い權威も生ずる道理であるが、只其新生命と權威とに由つて猥りに動くとすれば、鑄型はまた只一人の新生命と權威とを鑄るにとゞまつて崩潰せねばならぬ。

芭蕉は元錄の天地に正風なる鑄型を築いたが、此大なる鑄型は、芭蕉一人の生命と權威とのみを鑄て能事了れりとしなかつた。そしてあらゆる方面の地金を收容して、立派に俳句たる作品を提供し得た。黃金は指鐶となり、白銀は花瓶となり、青銅は胸像となつた。かうした「自由」は果して何人に覓めて得らるべきか、我等は先人に於て之を芭蕉と子規居士との二家に見るの外はない。

子規居士の性格は芭蕉よりも或は精悍であつたかも知れぬ。然しそれとても畢竟は詩人として賦與さるべき天命の短かつた象徵に過ぎまい。我等は今日本派なる俳調がいかにして生れたるかを記憶せぬが、

我等は單に子規居士が日本新聞の紙上によつて、居士の俳句に於ける處見を述べ、そして居士の作品を掲げ、以て墮落した俳壇に、新らしい福音と光明とを投じたから起つた名稱に過ぎまいと思ふて居る。それが或は憶測であるにしても、居士は居士が日本派を樹てんが爲に故らに日本派を起したものでないと云ふ事だけは明らかな事實である。

子規居士は又芭蕉の如くに、自然の「慘虐」から自然の「自由」に生き、そして自然の俳句に甦るべく、研究を懈らなかつた一人である。居士は床上不治の病に悶へ、忍ぶべからざる苦痛に耐えて、而もなほ俳想を宇宙萬象の上に馳せ、そして明治俳壇に芭蕉の復活を想はしめた。



居士の作句に於ける表現は、矢張自然の迎合にあつた「松は花より朧にて」と云ふやうに、居士の句もまた餘り不徹底な法則に拘泥する事なく、寧ろさうした法則や「虐げ」から離れて、自然の旋律に生きるべく導かれた。

樵夫三人だまつて霧をあらはるる
橋を渡り橋を渡り春の河二つ
開いても開いても散る芥子の花
秋の水石白く魚うごかざる
首入れて落葉をかぶる家鴨哉

とあるやうに、概してさうした自然の光景と刹那の感激とに重きを置

いた。それは古人の句にも

家鴨渇をよばうて暮るゝ殘暑哉

とか、乃至はまた、

枯葦の一日〳〵に流れけり

とか云ふやうな、さうした刹那の感激とか、自然の印象を句作したものもないではない。其角の如きにあつてすら、其一代の句集から拾ひ集めたら、さうした句の十や二十見當らぬとも限らぬが、それは彼等が偶然の句に過ぎぬので、寧ろ彼等としては自信のない句であるかも知れぬ。

子規居士は如斯き自然に準據して、自然と迎合し、そして囚はれたる



句の「虐げ」を奪ふて「自由」に置いた。けれども子規居士沒後に及んで、大なる思潮の變化、急速なる事物の進展は、俳壇にも多少の動搖を餘義なくさせた。

それは明治の俳句は子規居士の手を俟て、非常に自由なものになつたに相違ないが、思潮の上にも、作句の上にもなほ且つ何處やらに「虐げ」の存在が認められた。敢て今更壇林を憧憬するの原始的思想を皷吹せぬとしたところで今少し自由な思想自由な形式に生きられる餘地はある。此餘地を開拓すれば、其處にもう一層新らしい生命の生れぬ限りはない、形式に長短はありとしても、俳句は即ち俳句である。無慮約三百年近くも持續した俳句を新らしいものとして、尠くともなほ

百年、二百年の後までも繼承するにはどうしたらよいであらうか、かうした思想界――殊に俳壇の動搖に伴ふて興つたものが、今の即ち新傾向派のそれである。此見解は或は寧ろ淺薄に過ぎるかも知れぬが、自分は固くさう信じて居る。

新傾向派が得た「自由」、それは芭蕉や子規居士やが得た自由から見てさまで大きさうな筈もなく、又其「自由」を得ると云ふ一事が、寧ろ芭蕉や子規居士の置いて行つた第一義によつて居るだけ比較的容易でもあつたらうと思はれるが、只其使命の完美にはこれから後隨分骨の折れる事であらう。我等は其根本義に於て句の眞相を誤まらざる限りさうした種々の形式によつて研究されつゝある俳壇の幸福を懷はぬ事



はない。

## 四　句に生きんとする悶へ

自分が俳句と云ふものへ首を突込んだのは、確か明治二十五年頃であつたと思ふ。その以前自分は佐々木博士の門に入つて、國語を學び、傍ら和歌の删正を博士に乞ふて居たのであつたが、どう云ふものか和歌らしいものが一つも出來ぬ、とう〳〵博士からかうした宣告を受くるに至つた。曰く貴郎の和歌はどうも上の句と下の句との聯絡がしつくり行かぬ、上の句は上の句で生き、下の句は下の句で生きて居る、先づ和歌は諦めた方がよろしからう。

そこで自分は考へた。成程自分の和歌には上の句と下の句との聯絡がとれて居ない、若し自分の句が博士の云はれる通り、上の句は上の句で生き、下の句は下の句で生きるとしたら、俳句を試みて假令成功せぬまでも、和歌よりは優つたものが出來やう、自分の性格や、周圍の空氣やから考へても、どうも俳句の方が自分に相應はしいやうに感ぜられる。いつそこれは俳句に生きて見たいと思つた。そこでまた自分は芭蕉句集や、類題句集や、何と云ふ事はなく、手當り次第に讀んで行く中に、多少俳句に於ける調とか、律呂とか、氣分とか云ふものも譯つて來た。

ところへ幸せな事には、其當時紫吟社と云ふ句會が紅葉尾崎先生と小波巖谷先生との主宰の下に起つて、主に小波先生のお宅か麴町清水谷公園の茶屋などで開かれたが、自分はこゝに自分の俳句を先輩に示し、そして其批判を受くる事となつた。

當時紫吟社の社中として、毎回出席された人々には小栗風葉氏も居た、柳川春葉氏も居た、泉鏡花氏も居た。つまり紅葉先生門下と小波先生門下とが中堅となつて、時には角田竹冷先生や、吉野左衞門氏なども見えたやうに記臆して居る。

其第二回だつたと覺えて居るが、自分は炬燵と云ふ題下に、かうした句を出すと非常に買はれた。今から考へると極めて舊式な、そしてまた極めて理窟に落ちた嫌味な句であるが、どう云ふものかこの句が

買はれた。

炬燵して蒲團一重の行儀かな

實際可厭な句であるけれども、その當時自分はかうした意味のあるものでなければ俳句でないやうに思つて居たので、自然さうした句も生れたのだが、第三回目か第四回目に試みた、

星飛んで水禽黒う眠りけり

と云ふ句は、自分としては著るしい進歩を示したものと云はねばならぬ。けれども下五文字の「眠りけり」は、それから五年ばかりして「眠る沼」にかへて見た。此方がどうも沈着があるやうに思はれる。

兎も角も此二つの句が、自分が俳句に遊ばうと志した當時の吟で、自分としては處女作である以上、今以て其句の巧拙はさて置き、捨て難く、忘れ難い句なのである。

爾後二十有餘年、自分の句は果してどれだけの進歩をして居るだらうか、自分は内に省みて、忸怩たらざるを得ぬ。それは尠くとも二十餘年の歳月を閲す以上、隨分多く駄句も吐き棄てたが、今假りに自分の句集を編むとしたら、どれだけの句が果して輯錄され得るであらう句集として世に示すべき句は、恐らくは一つもないであらう、こゝに至ると芭蕉や、蕪村やらの有繋に豪い事を思ふ。

入り易いものは句である、進歩せぬものもまた句である、只十七字を列べるだけならば何人もやる、けれどもその調や、その律呂や、そ

の氣分、その感情やが、しつくり合つたものを覓めたら、句と云ふものもまた一朝一夕に修め得られるものではない。

自分はいつもかうした感情に囚はれて、俳句を棄てたいと思ふ時がある。俳句から遯れたいと悶く時もある。そして少しでも自分の思ひ通りの句が浮んだ時に、その棄てたいと思ふ心や、遯れたいと悶く心やが、いつの間にかこの一句に虐げられて、その句の下に威服してしまふ、かうした事を繰返して、自分は句に疲れつゝ行くのであらうか俳句に生きると云ふ事もまた畢竟難い哉である。

## 五　鳴雪俳句鈔を繙いて

鳴雪俳句鈔は、先生が自身わざ〳〵自分の宅まで持參して贈られた書物である。「本が出來たから持つて來ました」と云つて下すつた懷かしみの深い書物である。

自分は心ゆくばかり此書を繙いた。書物は三六版の極めて瀟洒たる體裁で、誰の裝幀と云ふことは記して無いが、表紙の模樣なども可厭味がない。口繪にある先生の肖像も懷かしければ、例言の裏に印刷された寫眞版の先生の眞蹟「偶吐奇言驚四筵、風流六十有餘年、呼來鳴雪人皆譏、休說俳諧不低錢」の絕句も懷かしいものゝ一つである。

其の内容は新年、春、夏、秋、冬、歳末、雑と大別して、更らに天文、地理、時候、動植物、人事、前書附の句等に類別されて居る。句數は都合一千二百四十有餘、總三百八頁に亘つて一頁に二行、三行、五行、七行と、云ふやうに組まれて居るから、可也に見答へがある。先生は曩に鳴雪句集の著があるので、今度は句鈔としましたと云はれた。

本來「鈔」には手邊の「抄」とこの金邊の「鈔」とあるが、いづれも抄記摘錄の意であつて、廣熙字典に「抄」は「通俗文」を引いて、「遮取謂二之抄一、寫錄之目亦謂二之抄一」と誌し、「鈔」は徐弦の説を引いて「今俗別作レ抄」と記してあるのを見ても摘錄の意味に相違ない。同じ意味の文字とすれば手邊の「抄」よりはこの金邊の「鈔」の方が沈着きがあるやうに思はれる、そして「鈔」には「深遠也」と云ふ意も含まれて居るから、先生が「抄」を棄てゝ「鈔」を選まれた存意も大方は察し得られる。

我國のものとこそ思へ初日影
元日や一系の天子不二の山
七轉び八起のそれも花の春
春の夜を刀あづかる戀もあり
三日月や佛戀しき草枕
二君には仕へ申さぬ紙衣かな

初冬の竹綠なり　詩仙堂

と云ふやうな句や「陽炎や石の八陣汐落ちて」とか「初幟こゝにも日本男兒あり」とか云ふやうな句は、先生が常に樂んで揮毫されるところで、鬼の念佛や、達磨や、傾城や、鎧武者や、麻裃やの俳畫と共に、世間に隨分流布して居るやうであるが、此句鈔によつて自分は刹那の象徵にもつと大きな力のある句をいくつとなく味はう事の出來たのは全く先生の努力の賜である。

由來先生の句には主觀的思想の表現を自然に結びつけて器用に取扱はれたものも絕對に無いではないが、先生の本領は矢張り自然に對する刹那の感激にあつて、さうした句に先生の眞の生命が宿つて居る事



はこゝに云ふまでもない。

中外子は此句鈔に對して最も忠實な評論を吝まなかつた。彼はこれが爲めに貴重なる紙面の一段を割いた。そしてかう云ふ事を書いて居る、

俳句は即興文學なるが故に、時には洗練を經ざる句のあるは免れざる所にして、之を割愛して、唯金玉の名句のみを拔鈔するも一方法なれども、他の詩文と異り、即興的感興を顯はす上に於て、餘り嚴重なる取捨を經ざるも可也、想ふに句鈔は此意味に於て編纂せられたるなからんや云々

無論此評は句鈔が玉石混淆であると云ふ意味では決してなく、句鈔に

集められた先生の句中、刹那の感興を何の苦もなく十七字詩に纏められたものが、散見されると云ふに過ぎぬので、それは寧ろ先生の先生たる所以であると云ふ事を書き落したに過ぎぬ。故に中外子は終りに臨んでかう書いて居る。

換言すれば句毎に翁を表現せる所に在り、即ち所謂詐らざるの俳句也、平素翁と談笑する時、其眞面目なると、滑稽なるとを問はず、翁の談じ且つ論ずる所のものに親しめる予輩は、句鈔の一句一句に悉く其俤を髣髴し得るなり云々

前後聊か矛盾して居る觀もないではないが、要するに此句鈔中の勞作が概ね先生の本領から作り上げられて居る事を證據立てるのであつて技巧を弄せざる句作の上に多大の尊敬を拂つて居る。

四方拜はてゝや木々に風渡る
曉の提灯暗き初荷かな
春雨の草鞋夥し御師の宿
二十日月朧のまゝに夜は明けぬ
流れ木のだぶり〳〵と春の川
樹の猫に犬吠えて居る日永かな
春の夜の鳩のうめきや繪天井
日あたりや江戸をうしろに畑打
水吹いて植木涼しき夜店かな

夏羽織あるかなきかの水色に
行水の後ろを通る夜汽車かな

と云ふやうな句は、いづれも刹那の象徴を、ありのまゝに而も何の技巧なく取扱はれたものであつて、秋冬の二季へかけてもなほさうした印象の深い句が澤山ある。

それからまた前書附けの句には、老熟した先生の句作から溢れる感情の極めて強い色が覗かれて居る。眉白と云ふ人の幼兒を喪へるに、

蝶々よその菜の花の香に消えて

とか子規居士の奥州より歸られたるに、

夏痩やこれ松島の松の形



とか、團洲の死に、「荒事の柿の素袍も秋の風」とか、妻を失ひたる人に、「男手に秋の夜を吊る蚊帳かな」とか、肖像の成りたる日に「我に似た我に對して冬ごもり」とか云ふやうな句は、前書を離れて立派にさうした情調を味ひ得る句であらうと思ふ。

先生はまた「二君には仕へ申さぬ紙衣かな」と云ふやうな時代をよく憧憬される。そして句作の上にも、かうした時代の憧憬をよく言現はされる。

此句鈔の中にも、かう云つた句が可也多い、鳥渡春の部だけ摘出したところでも、

殘る雪踏んで落ち行く七騎かな

爲朝の弓弦はづすや春の雨
景清の番傘さして春の雨
天地丸日永の海に浮べけり
梶原が邸の草も摘まれけり
義經がまだ寄せぬ間の潮干かな
將軍のお茶を摘みしと古女
紅梅や左府大臣の牛車
北面に歌召されけり梨の花
清正の木遣音頭や花大根
烏帽子着て掉さす人か春の池



等がある。けれども「殘雪」の句とか「天地丸」の句とか「北面」の句とか「烏帽子着て」の句とか云ふやうなものは寧ろ其情景を昔時の風物に借られた爲めに、この憧憬が反つて其句を生かして、優美な情調が溢れて居る。殊に「五月雨の合羽摺れ合ふ大手かな」とか「草市や更けて物買ふ武士の妻」とか云ふ句になると、恰かも廣重の繪を見るやうに、維新前の江戸の氣分が髣髴として、繙く者の心を唆らずには居ない。

五月雨に赤合羽の摺合ふ下馬先きの混雜は、某の大守が下城の權威を想はせずには居ぬ。また草市に夜更けて物を買ひに出る武士の妻がどんなにその薄給の生活に窶れて居たらう、品の好い三十格好の女房

がうらぶれた俤を懷ひやらずに居られぬだらう。

かうした扱ひ方によつて、先生の句は多くの場合憧憬を巧みに現實し得て、そして句の印象を深からしめて居る。先生の天才に裏書するさうした技巧が、益々先生の句作を廣い天地に導いて、强いて小なる新らしい事物の上に句を覓めずとも、自然に進展し開發し得られるのではなからうか。

頂戴した句鈔に對しての妄言は幾重にもお詫するの外はない。



## 六　青き無花果の實

□

貴賤雖レ異等出レ門皆有レ營で、誰でも丈夫で一歩門外へ出れば、何かしら忙しない營みに趁はれ、到底思索の暇もないが、幽居の情は自づから別なものがあるらしい、私は此の夏を約三旬程病褥の人となつた。一氣慿々世間を閑却して始めて平常讀みたいと思つて居た書物を、心ゆくばかり味はうことが出來た。病氣と云ふものは、さまでの苦痛に囚はれぬ限り、人を新らしい境地に導く索繩のやうにも考へられる。寂寞の間から自覺が生れる。憂愁の間からまた自個省察が確か

になる。

□

一歩門外を見ぬ私にとつては、旅の消息に接する事が、最も懐かしいものゝ一つであつた。殊に繪葉書へ句などを書いて贈られたものに興味を呼んだ。一枚の繪葉書、苟且の句の上にも、私は心に其場所とその感興とを想像し得る時間の餘裕をもつて居たからだ。

□

一夜豪雨があつて、崖の胡桃が覆へつた。その胡桃は、私がまだ子供の時分からあつた大きな樹で、何となく惜しいやうに思はれたが、二股に分れた其一本は既に枯れてしまつて居た。山の家の湯殿か物置かが見えすけるさへ、餘りよい感じはせぬ。月の爲めには常に邪魔な胡桃であつたが、矢張あつた方が好いやうに思はれる。

□

また一夜私は私の老いた事を沁々と考へぬ譯に行かなかつた。私は戯れにこんな短歌をノートへ書いた。

ともすれば若き心にうらぎりて戀はあせしと思ふ夜もあり

□

病褥に胡座して素州君と句を談じた、そして南柯誌上に於ける幹事共選の句に及んだ。それには兀愚君の選にかう云ふのがあつた。

宿り木の白き花散る夏木立　豫州

私は寄生木に未だ花の咲いたのを見た事がない、寄生木は多く榎とか櫻とかに見るのみで、どうも白い花が咲かうとは思はれない。果して白い花が咲くものであらうかと云ふと、素州君もまだ見た事がないと云ふ。

□

いづれ此事は兀愚君に聞いた上の事で論議しやうと別れたが、不圖烏嶺、曙山兩氏同著の「やま」を見ると其淺間登山の項に誌して、

仁王坂に至る間、路傍にゲンジスミレ等の高山性植物を產す。又附近の喬木にヤドリギ多し。ホザノヤドリギの如きは稍々珍とすべし。

本種は長野附近にありても、之を見る事あれども、之を普通のヤドリギに比すれば相違せる點尠からず、莖は木質をなして長さ三尺に達するものあり、葉は普通のヤドリギよりも狹少肉薄し。秋季に至り落葉す。花は總狀をなし白色小形、果實は楕圓形をなし、熟すれば黃色を呈す（中略）寄生は多くナラの類なり。

とあつた。後兀愚君の說によれば、四國邊では普通の寄生木にして白色の花を着けるものがあると云ふ。

□

褥中私は旅行記や詩集に最も多く親んだ。自己が步行の不可能を感ずると、勢ひ他の健脚によつて蹈破される山川に、意外の親しみをもつものだ。そして殆ど棚上のあらゆるさうした書物を涉獵り盡して

まだ何か會心の紀行文に接したく思つた。

虛嵐澹翠晝霏々、臺殿高低峯影圍、三級瀑聲吹石轉、八觚塔勢截雲飛、梅花已懺山中夢、鷗鳥兼忘海上機、擬就歌姫重乞食、老僧壞色即吾衣。

――登華嚴寺　星　巖――

此詩に表示されたやうな、自然の憧憬に富んだ文章を熱望した。

□

其處へ坪谷水哉氏から自著「東西南北」を贈られた。私は尠くとも饑から甦る事が出來た、そして耽讀一夜鷄鳴に及んだ。

□

車夫が道普請をしながら日光の棧道を降り行くところなどを殊に面白く讀んだ。四五人の西洋人が、五人の子供を連れて、暴風雨後の棧道をテク〳〵やつて行くさまなどが、日光の氣分を味はしめた。

□

親不知の險に少年の案内者が自個の境遇を語る條なども、有繋に旅の面白さを感ぜしめる。そしてまた人生の儚なさをも痛切に考へさせられる。

思へば父は生命を一片の孤帆に託して、半歳をオコツク海の果に送り、三月出たまゝ最早五月になつてもまだ便りも無い。子はまた日本海の荒磯に親の所在も知らずに日を送る、是こそ現世の親不知子

不知ではあるまいか。僕はこの少年が、地理上の親不知子不知を案内する前に、先づ人生の親不知子不知を見て、覺えず涙ぐまざるを得なかつた。

と結んである。羈中の哀愁事、確かにまた人生の大きな皮肉であるやうにも考へられる。

□

皮肉と云へば「笑府」にこんな事が書いてあつた。一場の笑話柄としてしまへばそれまでだが、かうした皮肉な滑稽は隨分世の中にあり勝ちな事であつて、誰しも日常不知不識の間にやつて居る事實であり矛盾であり、自然の諧謔であると思ふ。

三人同臥、一人覺腿痒甚、睡夢恍惚、竟將第二腿上、竭力抓爬、痒終不減、抓之愈甚遂至出血、第二人手摸濕處、認爲第三人遺溺也、捉之起、第三人起溺、而隔壁乃酒家搾酒、聲滴瀝不止、以爲己溺未完、竟站至天明。

□

三人臥て居たら、一人が腿が痒くなつたので夢中で爬くと、それは隣りに寢て居る男の腿だつたので、いくら爬いても限がない、餘り強く爬いたので、その男の腿から血が出たが、その男もまた寢惚けて居るので、何だか冷たいが、これは其の次に寢て居る男が寢小便をしたに違ひないと思つて搖起すと、其男もまた寢惚けて居るから、急いで

便所へ行つた。すると其隣家が酒屋なので、搾つた酒の樽へ滴る音がチョビン〳〵と響いて居る。その音をまた自分の小便の音と思つて、夜の明けるまで立盡して居たと云ふのであるが、詩人や俳人の生活には、えてかうした一種の因果律があるやうに思ふ。

――大正、四、八、廿一――

## 七　子規居士展墓句會

晏天時に一朶の雲を送ると雖も、敢てまた雨を下さずと云つたやうな秋の氣分が、何處にも彼處にも漲つて居る九月十九日の朝でした。大正四年九月十九日。私は豫て南柯の幹部から、其日は恰かも子規居士の第十四回忌日に相當するから、展墓旁々俳席を郊外に開きたいと云ふ案内を受けて居ましたので、降りさうな天氣も構はず傘なしで出掛けて行きました。

勿論私達の集合地は豫め上野山王臺と極めてありましたので、急いで行つて見ると、其處にはまだ都章君の外、誰一人見えませんでした或は何處か集合地點が變つたのではあるまいかなど、話し合つて居る中に、醉雪君が見える、沖外君が見える、雪松、兀愚、九茶、素州、櫻國、夢村、凉夢、潮二、銀杏庵、淺草の人、笑箋諸君と云ふやうに追々に集まつて、こゝに都合十五名の一團が、徒歩田端の大龍寺に向ふ事となりました。

この日鳴雪先生も是非御同伴下さる筈であつたのですが、急なお差支が出來てお見えにならず、また畫家の北陸君は、文展が目睫の間に迫つて居る爲め宿題の句をよせられたまゝ、これもお見えにならなかつたと云ふ事が、どんなに私達を淋しがらせたか知れません、またどんなに私達を失望せしめたか知れません。

谷中から日暮里、日暮里から田端へと、可也の道程を宿題「鶏頭」の苦吟やら、居士の追懐談やらに蹈破（私は強いて蹈破と云ひます、何となれば私の病後第一の遠足で、可也苦痛を感じたからです）して午前十一時を過ぐる頃にはもう大龍寺に着いて居りました。

居士の御墓は其前日兀愚、素州兩君が一度參詣して居られるので、私達はまた兩君の案内で容易に展墓する事が出來ました。

御墓は墓地の一角を比較的廣く占めて、後ろは煉瓦塀に、前は四目垣に圍まれ、三段の臺石の上に、長方形の赤花崗石が樹てられて、それには子規居士の墓と誌されてあります。忌日の事でもあり、參詣者も多いと見えまして、もう其時には種々な草花が供へられて居ました。

殊に私達の注意をひいたのは、其の臺石の上に供へられた二つの青い柿でした。あゝ、柿。居士が生を終るまで嗜まれた柿。私達は滲み出る涙を禁める事が出來ませんでした。

寺男が落葉を掃いたり、水を捧げたり、花を供へたりする間、私達は交る〳〵墓前に額いて懇懃に居士昔日の風懐を偲びました。そして

加藤寫眞技師を煩はして、墓前の撮影を試みましたが、此時香煙に袴を燒いた銀杏子君は、さも〳〵好紀念を得たと云ふやうに、莞爾としてレンズの前に立たれたやうに見受けました。

さて俳席を僧房でと云ふ説もありましたが、墓前蕪吟を聯ねて、徒らに居士の俳靈を驚かすは、寧ろ敬虔の意を缺く事甚だしと云ふ慮から何處か附近に好俳席を得たいものと、私達は寺門を出るとぞろ〳〵とまた元來た道を辿りました。

けれども其邊には生憎打開いた芝生もなければ亦居心地のよい茶店のやうなものも見當りませんでした。蛭に臨んだ狹い道路の草の上に憩ひながら、日暮里まで下らうか、それとも汽車で飛鳥山まで伸さうかと云ふ議論に長い時間を費しましたが、結局飛鳥山と云ふ説が勝を占めて、田端停車場の方へと向ひました。

こゝ數年前から急に開け始めたと云ふ田端の丘には可也種々な新らしい店が目につきましたが、中にも停車場への坂の上にある「更科」と書いた看板が、私達の心を唆らずに居ませんでした。

「こゝにしやう、こゝならば屹度可い」かうした言葉が誰の口からとなく傳へられて、私達はもう何の躊躇もなしに其門を潛るのでした。

田端の停車場から遠くは秩父までも連つて居るかと思はれる稻田、收穫に近い垂穗の色が、薄日和の空に反映して、其間を白堊塗の大きな建物や、長い煙突やが飛々に劃つて居る、さうした秋の大パノラマ

を前にした私達は、あるだけの床几や椅子やを庭の西隅に集めて、理想の俳席を設けました。

持參々々の風呂敷からは海苔鮨やら握飯やら、さま〳〵のものが取出されました。そして宿題鷄頭五句、即題蟲二句、秋風三句が恁ち短冊の山を爲して蒸籠の蓋に投入れられるのでした。

私の披講は屢々汽車の通過や、汽笛やに妨げられました。互選の結果兀愚君十五點（一等）、櫻國君十二點（二等）、潮二君十一點（三等）と云ふ結果を得ました。果して居士の墓前に捧げ得べき句であるや否やは別問題として、こゝにはその中の一句づゝを擧げて此稿を結びたく思ひます。

手向れば重き頭や鷄頭花　銀杏子
忌に籠る人徒然や蟲の聲　雪松
橋落ちし荻の水嵩や秋の風　兀愚
菩提樹の影ひける庭の鷄頭かな　冲外
石車曳捨て草や晝の蟲　素州
鷄頭花干網に夕日迫りけり　九茶
瓦燒く煙の白し秋の風　櫻國
鷄頭の頭押合ふ野尻かな　北陸
秋風に圓く擴がる投網かな　涼夢
鷄頭の日にうなだれて忌日かな　醉雪

蟲啼くやだら〳〵徑の月の冷　夢村
靜かさを星飛ぶ程に蟲澄めり　笑箋
俤や此奥城の鷄頭花　都章
鷄頭の頭に殘る夕日かな　瀨二
鷄頭や戀の尼僧の頰の痩　淺草人
淀殿の蟲に治部召す燈かな　鶯塘

## 八　埜前想句錄

（鶯塘俳文集の中より）

われ十五にして弓ひき習ひけるが、始めは只的に中てんことをのみ願ひつ一矢梁の外に出づるも惜まじ、一矢は的を貫かば足れりとしぬ。されば其射を學びてより一年、的は尺二より、尺となり尺より八寸八寸より五寸と上りて、果ては百歩に柳葉を穿つと云ひけん、よしやそれには及ばずとも、三寸の小的に向つて甲乙の矢を送るに、一矢は必らずその正鵠を貫きぬ。引しぼりて放つ矢に仇とてなく、百發百中の妙、吾ながら天晴の弓取を以て慢じ、早く既に名人の境に入んぬと誇りて其處の梁、此處の的場に競技の弓矢を擔ひけん、そも盲人蛇に怯ぢざる振舞恥かしと後に思ひぬ。

二年と經ち三年と閲し、射漸くわれに親しめば、只的に中るのみが上手にも名人にもあらず、よしや中らずとても、遠き外れ矢を見ず的

を繞りて、射たる矢の歪らず紆らず梁へ立つなる、畢竟は射前にあり て、足八文字に蹈開き「打上げ」「狙ひ」「切れ」にも故意らしき節な く、自然に弦の離るれば、弱き弓にも力籠りて、矢にも羽鳴りを生み 始めて的に中りこそすれ。いかにもと合點して更に射前に心づく時は 嚮の中りはあだし野の煙と消えて跡なく、肩根入れば、足の蹈開きを 忘れ、蹈開き確かなれば「切れ」面白からず、其處を矯め、此處を整 し、さまざまに氣にいらちて、五年十年なほ其堂を入らで過ぎにき。 今句に親しんで、また其難き弓に劣らず、十年、二十年遂に會心の 句なきを恥ぢぬ。始め運座に多く估はれて、我はと思ひあがれる句も 後見れば只技巧に走りて生氣あるなく、徒らに時に媚びつるが恥かし

くて、搔破り棄てつるも多くあるべし。何の會に三才に入んぬ。何の 席に秀逸を占めたりとは、只的に中てんとする矢の中りしに過ぎずし て、射前の亂れ、人の啞ひを顧みざる烏滸の沙汰なりし。一句は百點 に價し、一句は零なる時、未だわが技の足らざるを感ずれば、一生を 句に捧ぐるもなほ名人上手の域に臻ること難からん。

さればこそ鬼貫はその「ひとりごと」に云ひぬ。「俳諧をする人あら ましにもいひこなせば、はや得たり顔に止まるあり、無下にほいなく ぞ侍る。或時は句もなりやすきやうに覺え、又ある時はひたすらなり がたくもあり侍らん事、幾かはりもありぬべし、深く入りなん人は、 その程々に功つもりて猶むづかしき事を覺え侍らん、修行の道に限り

あらざれば、至りて止まる奥もあらじ」と喝破し、初心を誡めて、句の精神を諦らめ、深く修めよと薦む。

その「あらましにもいひこなせば、はや得たり顔に止まるあり」と云へるは、射にあつてはそのひき初めて一年ばかりせる際なり。只中りにのみ氣を奪はれて、射前を顧みざる折節の心の矜りにもや、更に「さる時は句もなり易きやうに覺え、またある時はひたすらなり難くもなり侍らん」とあるは、聊か射前にも注意し、中りも惜しく、心の惑へる弓に「ひき過ぎ」、「ひき足らず」の生ずるにも似たらんか、かくて兎も角も此境だに超ゆれば、弓も句も一段の功者を重ぬるものにして、愈出でゝ、益々深きを想ふべきなり。これを射とすればきつて放ちし矢が、自然に的の正鵠を貫く事、尚鬼貫の「新らしく作りたる句はやがてふるくなるべし、永久に、古くもならず、又新らしくもならぬことを能句とは云ひ待るべくや」と云ふにかなへるならずや。

動く句は射にあつては肱のしまらぬなり。感激の鈍き句はまた射にあつて心に沈着なき粗忽の離れなり、即ち古への俳人が、百日の稽古より、先づ一日の座功を勵むが如き、要は人の振見てわが振直すの優れるを知ればなり。

由來射は君子の爭なりと云ふ、まことや往昔武道第一位を占めて、御射場始めの射禮より、さては大矢數の矢繼早に至るまで、名をこそ懷へ、曾て卑しき爭に出づる事なかりしが、射は遂に砲に及ばずして

いつか遊戯の具となり下れるより、賭して點取の卑しき沙汰となり、二點三點を爭ふの君子らしからざるに至りぬ。句もまたやがて遊戯三昧の、賞を懸け貨を賭して、これが勝敗を爭ひ、異閥黨同の果は、互に閲ぎ、相憎みて、蝸牛角上の爭、見るからが其本分を忘れたる沙汰なり。

舊きを棄て新らしきを採る、もとより斯道進展の策ならぬはなく、俳壇高上の手段たらざるなきも、甲派を貶け、乙派を譏り、徒らに自我を立てんとするが如きは、そも〳〵謬れるの甚だしきものならずや。

日置には日置の長所あり、竹林には、竹林の妙所あるべし。射の巧みなるに於て、豈日置と竹林とを論ぜんや。月並の句にもたま〳〵新しきを見るべく、新らしき句にもたま〳〵舊きもあるべし。異端として他を貶け、顧みざるが如きは、「あらましにも云ひこなせば、はや得たり顔する」類なり。況んや連歌の味ひを得知らず、百韻の掟をも辨へで、俳諧は詩にあらず、俳句に於て始めて詩たるべしなど云ふが如き、弓を倒まにとり、矢をあらぬところにつがへて、なほ射を論ずるに等しかるべきか。

弓もて的を割り、眼分量に切つて放すと、羽摺籐に南京球どもつけ照準を上下して的に向ふとは、其狡智比すべきにあらずと雖も、射はもとより氣をもつて勝つもの、照準は即ち低級なる景物に過ぎずして的には巧みに中てたりとも、曾て誇りとはならざるべし。

句に於ての狡智、また如斯くならざらんや。技巧只世に阿りて、多く人に估はれん事を望み、句にまことの味ひを忘れて功利を急がんとて、弓に照準をものして、點取の的に向ふが如きか、引込みは頬を過ぎず、「切れ」は馬糞を掴みたらんやうなる、誰かこれを達人と云ふべき、梁前たま〳〵句を想ふ毎にわれ二つながら其遂に及ばざるを歎ず。

## 九　俳士と臨終

或人は云ふ、俳諧に遊ぶやうな人の最後は悲慘であると。

また或人は云ふ、俳諧に遊ぶ程の人ならば、その最後は極めて美くしくなければならぬと。

成程考へて見ると、此兩者の見解には各道理がある、昔からよく「唐樣で書く三代目」などゝ云つて、兎角俳諧に遊ばうなどゝ云ふ人には理財の頭が乏しい、從つて其最後は悲慘であらう、また今日までの俳士中には隨分悲慘な人達も多い事であらう。

谷活東と云ふ男が、何とか云ふ病院で死んだ時、自分は切にさうした感じに動かされた。

彼には妻もなかつた、子もなかつた。そしてまた金も無かつた。病院の施療室に横はつて、冷たい看護婦の手に死んでしまつた。これを彼の芭蕉が浪華に於ける客死と比較したら、隨分悲慘であつたに相違

ない。

芭蕉の客死も、「旅に病んで夢は枯野をかけまはる」で悲惨と云はゞ悲惨に相違ないが、彼は多くの門弟に圍繞されて、手厚い介抱も受けそしてゆつたりと瞑する事が出來た。それに比べたら活東の死の如きは淋しいものであつた。

子規居士の死に就いては世間既によく知られて居るから、こゝに多くを贅するの要もないが、居士もまた芭蕉と同じやうな臨終であつたと思ふ。

王侯將相と雖も、人間の死は悲惨である。死は獨り俳士にのみ來るものではないが、俳士は金が無いだけに特に悲惨と云へやう。けれど



もその死んで行く人達にとつては、寧ろ超然たるところがあるに相違ない、「旅に病んで」の辭世を遺した芭蕉も、「糸瓜剪つて」の句を一期として逝かれた子規居士も、乃至は一句の辭世だもとゞめず死んだ活東も、病苦に堪える慰藉、後世を樂む悟道、それ等は一致して居らねばならぬ。悲惨にして美くしき最後、俳士の以て誇りとするところであらうと思ふ。

## ＋ ある夜の思出

口葉吉と名詮る人が訪ねて來た。私は未だ曾て一度も逢つた事のない人であるが、其人の雅號は「海紅」でも承知して居れば、乙字氏との

事件でよく知つて居た。

□來意を諮へば、俳句に關して聊か意見が聞きたい爲めだとの事であつたが、其餘りに突然であるのと、問題がまた餘りに茫漠たるのとで數分時間と云ふもの、私は只其人の顏を瞻めるの外はなかつた。

□私はこれまでも、可也澤山の人に接したが、此人程純な、熱の高い、魅力に勝つた力强い感情をもつた人を見た事がない。

□露風三木氏は、私を評して、善い意味に於けるヂレッタントであると云はれたさうであるが、私は私自身善い意味に於ても、惡い意味に於てもヂレッタントである事を自覺して居る。同時に私の周圍も自我を沒却した、固執のない、寧ろ多趣味の人物が多いので、葉吉のやうな人に會つて居ると、私は何處か緊縮した心持になつて、丁度頭に灑がれた冷水が、心臟の底の底にまで、烈しく滲みわたつて行くやうなさうした敬虔と刺擊とを感ぜずには居られなかつた。

□葉吉氏は問ふた、新傾向をどう云ふ目で御覽でせうか、と私は答へた、新傾向の俳句は俳句として最高級のものではあるまいか、其詩形に於て既に低級のものとは云はれぬ、假令ば生花に於ける南宗瓶花の如きもので遠州、微笑、あらゆる流派の其一を究めて後入るべきもののやうに考へて居る。

□葉吉氏はまた云ふ、藝術に由來高低のあるべき道理はないが、若し世間がさうした目を以て新傾向を見て居るとしたら、新傾向の爲めに

は喜ぶべき事であらうか、或は悲むべき事であらうか、私は寧ろ悲むべき事であらうと思ふ。

□私は云ふ。無論藝術の上に高級低級のあるべき筈はないであらう、私は只卑近に之を説明したまでに過ぎぬが、世間の多くは恐らくは私と同じやうな見解の下に新傾向を見て居るであらう、喜ぶべきか悲しむべきかと云ふ問題は別である。

□葉吉氏更に云ふ。短歌の人々は互に相提携し、相賞揚し、其間一脈の和氣が漂へるにも拘はらず、俳壇は常に相反目し、相指彈し、一人は一人より、一派は一派より面白くない感情が常に漲つて居る。此點に於て俳壇は歌壇よりも遙かに墮落して居るものと思ふ。

□私は云ふ。或はさうかも知れない。然し、さうした反目や、指彈やは常に新らしいものを〳〵と覓めて居る。動搖した空氣を横ぎる光線が屈折して見えるやうなもので、根本義は動かぬが、其研究の方法と目方とによつて個性は他を凌がうとする、さうした現象は寧ろ俳壇の隆昌を意味して居りはせぬか、短歌と句とを同じ詩形の一つと見做す時は、其構想に於て、格調に於て、俳句は短歌よりも遙かに高上して居る事は事實であると思ふ。

□葉吉氏は云ふ、尠くとも今の選者なるものを改造し、覺醒せしむるの要はあるであらう。何となれば、苟も選者たる以上、他人の勞作に對しては同情と敬虔と、更に嚴密なる致査を要すべき筈である。今の

選者の多くには、其選むべき多くの句に對して、果してさうした信念があるであらうか。或者は一千句の中から僅かに其一句を選んで責を塞いで居る。若しこれを一人の勞作とすれば、千句は千句ながら其人の誠である、其人の心である、また其人の血である。むざむざと取棄られた句に作者の生命の宿つて居るものがないとも限らぬ。怠惰と放慢とは今日の選者の常であつて、作句者はこれが犧牲たるに過ぎぬ。選者の改造は目下の急務であると思ふ。

□私は此問題に就いて深い羞恥と、重い責任とを今更のやうに感じた

それは私が選者たる資格もなければ、選者としての權威もないにした所で趣味の上から他人の句を選ぶ場合が多い。自分の擔當しつゝある凡ての選句に在つても、これまで可也深重な態度を持つて對しては居たが、まだ〳〵さうした同情と、さうした敬虔と、更にさうした信念とを以てかゝらねば、先づ自分から改造されねばならぬ筈である。

□私は答ふべき辭を知らなかつた。そして要領を得ることなしに、葉吉氏は歸つて行つてしまつた。私もまた新傾向に對する同氏の意見を叩く間もなしに別れたのである。ある夜の思出は私に長い印象を與へて居る。假令それが座談の斷片であるにしても！

## 十一　足跡を辿りて

主義もなく、主張もなく、論議もなければ説明もなく、僅かに鳴雪

先生の「月高し來れわが兄わが弟」と云ふ祝句と、私の「秋の海帆一つふえて雲美なり」と云ふ句が四號活字に組まれて、宣言とか趣旨とか云ふやうなものを代表し、八頁の新聞體の貧弱な「南柯」の生れたのは、實に大正二年の十月であつた。

自然の默契、自然の暗示によつて生れ出た「南柯」は、丁度春の温い雰圍氣に包まれた花のやうに、俳壇の一方に小さなほゝえみを見せた。そして第二號は更に菊判八頁となつて、稍雜誌としての體裁を整へ、逐次進展して三十四乃至三十八頁のものを毎月缺かさず出すやうになり、第二卷の四號からは、更に小波、亞浪兩先生が賛助員として、選句を擔當して下さる事になつた。

八頁から三十八頁にまで進展し來た足跡、この足跡を辿つて見ると可也面白い變化が見られる。これは啻に某々氏等が一身上の都合から去つて新たに某々氏を迎へた事や、西村渚山氏を迎へて誌上に短文を募集し始めた事や、毎月一回俳　會を設けたと云ふやうな、さうした事件の上のみでなく、同人を始め、毎回例會に臨まれる人々の句作が、技巧を離れて、漸く氣分に入り、氣分を離れて、また漸く生活の眞純意義に入りつゝある、そうした傾向が窺がはれもするからだ。

私はさうした傾向を非常に嬉しく思つて居る、あらゆる新らしい句形の長所をとり入れて、生活の意義と關聯せしめ、そして眞面目に新らしく洗練された句を見る事は、八頁の雜誌が、三十八頁の雜誌とな

つたと云ふよりも、「南柯」としては、寧ろ大きな進展で、また大きな誇りであらうと思ふ。

私は何處までも、「南柯」の俳句が純な生活の反映から新らしい形式に生れねばならぬと云ふことを始終心に思つて居る。飽くまでも季題に囚はれたり、約束に拘泥したくないと考へて居る。季題から自由に離れて、内的生活の純な感激に到達し得たいものだと願つて居る。然し私は飽くまでも季題は尊重したい。また飽までも俳句の約束は無視したくない、小春に咲くいぢけた花を觀たいとは思はぬが、さうかと云つてまた温室で咲かせた花も觀たくない。

かうした傾向は「南柯」進展の足跡に辿れば誰しも心づくところで



あるが、殊に私は同人中の吉田兀愚子などが、此急先鋒であるかのやうに思はれてならぬ。試みにこれを創刊からの同子の勞作に見ると、適確にさうした進行の經路、さうした覺醒の跡が窺はれる。

追行けば星となりたる螢かな
霧晴れて煙吐く山の聳えけり
枯野來て藁焚く人と語りけり
曉の水に月あり青嵐
蛾の群の迷ひ寄る軒梅雨に入る

と云ふやうな句は、凡て子が創刊當初の句であつて、自然と迎合し同化せんとする上に多大の努力を認め得られるが、凡てが尙刹那の感激

を基として生れた輪廓の句であつて、「個」とか「生」とか「眞」とか「純」とか云ふものにはまだ多く觸れて居ない、それが第三卷頃から、漸くさうした方面に目覺めて來て、

石嚙んで重き足駄も雪解かな

草餅に語り更く貰ひ風呂に來て

と云ふやうな、生活の一部を表現した句がちらほら見え出し、最近にはまた、

飛盛る蜻蛉に煉瓦積みゐたり

旱雲日々湧きて茄子瘠せにけり

と云ふやうに、凡て生の上から感激し、咏嘆した句に大きな力を認めるやうになつた。そして其輪廓から內部に向つて、深く且つ眞面目に食入りつゝあるのが、私の眼には丁度霞から霽れて行く大きな山のやうに見える。

以上は強いて兀愚子の句に對する態度をのみ批判したのではない、「南柯」の上に絕えず流れつゝある慨念とか思潮とか云ふものが、この三年間にどう云ふ風に推移し、どう云ふ工合に進展し來たかと云ふ表象として、子が具體的の態度に廂を借り、私としての小さな滿足を告げたまでゝある。「南柯」の足跡に就いては、未だ論議し批判したい事も可也多い。また多いに相違ない、けれども自分は今少し靜かに觀察して他日これが第二の稿を次ぎたいと思つて居る。

## 十二　俳句の物質的能力と其効果

――（鶯塘漫録の中より）――

俳諧水滸傳であるとか、俳諧畸人傳であるとか乃至は、鷄口集であるとか云ふやうな書物を讀んで見ると、ある夜古俳人の庵室へ鼠賊が忍び入つたところが、俳人が眼を覺して、「盜人も戸を閉じ行く寒さかな」とやると、その鼠賊は此の句意に感じて、折角掠めた財寶を戻して立去つた事の、又ある古俳人が時の早魃を救ふとあつて「夕立や田を三圍の神ならば」とやると、天之に感應して雨を降らしたなど云ふ事が不尠書かれて居る。

そこで後世俳句に於ける物質的能力及び其効果がいかにも廣大無邊の如くに傳へられ、天明以降の俳句には、主として此物質的能力の發揮に努め、從つて古俳人の自然を咏じた俳句にまで、無理に此能力と効果とを結びつけるに至つたのは、寧ろ俳句の眞生命を汚瀆した一種の僻見に過ぎぬ。

それは俳句にあつても、直接間接に物質的能力及効果を示す場合がないとは限らぬ。先年ある地方の俳友が訪ぬて來てかう云ふ話をした。それは俳友の村は由來賭博の盛んな所で、これが爲め村民の多くは正業を懈り、村は追々に寂れて行くと云ふ有樣であつた。そこへ件の俳友は大に俳句の趣味を鼓吹し、俳句の賭博に優る所以を逢ふ人毎

に語つた所から、疾に一村の美習を招き、賭博は全然地を拂つたと云ふ事であつた。これ等を若し俳句の物質的能力及効果と見做したら、或は首肯し得られぬ事もないが、自然と同化し、更に自然を凌駕するの精神的能力に比しては、極めて小なるものである。

強いて物質的能力と云ひ、更に物質的効果と云ふ、慶弔の句とか、名廣めの句とか云ふやうなものもまた畢竟この範圍に屬さねばならぬ古英雄の名がたま〳〵文藝によつて價値づけられて、今日まで傳へられて居るところから、一概にこれをその文藝が英雄に對する物質的能力の發揮とは云ひ得られぬが、慶弔の句とか、辭世の句などによつて其人格を高め、その品位を揚げやうと試みるに至つては、既に俳句の眞意義を沒了したものであつて、反つてその物質的効果に意外の反映を見ぬとも限らぬ。

よしや俳句にさうした物質的能力や効果やが伴はねばならぬにしたところで、俳句其ものが既に一種の詩形である以上、それ等の凡とは全然沒交渉であるべき筈である。俳句は自個の思想感情から生れる即興的藝術品である以上、能力を外に發揮し、功利を他に覓むべき性質のものでは決してない。俳句の眞の生命は自然の同化にある。議論は別としても、俳句を作らうとする場合に、物質的能力や効果やを夢むが如きは畢竟不埒千萬な態度である。

## 十三　藝術と周圍

▲俳句は其場合の感觸によつて、電車の中でも相應に面白いものが生れるかと思ふと、一晩苦吟してどうしても纏らずにしまふ事もある。もし辛うじて纏つたものにしても、其句は何等の響きもないものがある。直覺的に得た俳句の推敲、それは是非必要であるに相違ないが、感じに遠い季題に囚はれて、徒らに苦吟する程莫迦なものはあるまいと思ふ。

▲この感じと云ふ事に就いてもだが、其場所、其時、其刹那の思想によつて、同じ自然に對しても見方が違ふ。長く眼を瞑つて不意に太陽を見た時に、太陽は黑く見える。赤いものを見つめて居た後に黑いものを見ると、それもまた赤く見える。かうした感じは敢て視覺の錯誤とか、不具な感覺とのみ云ふのでは決してない。これもまた自然の結果から來るのであつて、他人の到底聯想し得べからざる句が生れぬとも限らぬ。

▲之を繪畫とすれば今の所謂後期印象派など云ふ派の繪畫は、かうした感じを巧みに描かうと努めつゝあるので、美術から遠ざかつた眼よりすると、いかにも不自然な描寫と思はれるものもあるが、自個の思想や感情やを各方面に轉換させて、長くその繪に對して見ると、畫家の其刹那の感觸と迎合して、尠なからぬ興味を覺える。

▲かうした思想の一致、かうした刹那の感激、そこに美術の生命もあれば、文學の生命もあるので、觀者なり讀者なりを牽引する力の強いもの程勝利者たる所以である。

▲周圍の批評とか品騰とか云ふ事を顧みて、その周圍の空氣に觸れたいと試みた藝術や、周圍の思想感情を個人に迎合して作られた作品やに、眞の價致のありさうな道理はない。

▲況や俳句の如きは、短かい――字數の上から云へば極めて貧弱な詩形である以上、自個の感觸をありのまゝに云ひ現はしたものが、尤も價値あり、長い生命あるものであらうと思ふ。

▲藝術に於る「自我」、「誇り」、それは一面に於て其藝術に携はる人の純な思想であつて、また最も價値ある生命ではあるまいか。芭蕉の如き俳聖、その人の句集を見ると、可也に駄句もあるが、その人の「自我」と「誇り」、則ち純なる思想に至つては、遂に俳聖たるに背かぬであらう。

▲凡そ物に忠なる場合は、餘り多く他を顧るものではない、周圍の空氣や、周圍の感情を忖度して、藝術を弄ぶ、其處に何の純、何の忠が見出されるであらう。

▲何處の會にはかう云ふ形式の句を捧げると、互撰の一等に入るべしとか、誰の選者にはかうした形式の句を投ずれば天位を得べしなどゝ云ふ事は、有繋に悧口な考へには相違ないが、さうした句を後に見て果して會心の作たるや否やは疑問である、眞實味に訴へて、何の蟠り

もなく吟詠した句に、反つて其句の生命を認めるものがあるであらう。

▲自分は今痛切にかうした事を思ふ、それと同時に飽くまで純な思想から、自然に對して見たいと悶へて居るが、議論は格別として、曾て現實されぬ事を憾みとする。周圍。周圍は藝術の敵である。そして自分が句に對する推敲は、句の推敲ではなくして周圍の空氣に迎合すべき準備であると云ふ事を恥ぢる場合が屢々ある、諸君にはかうした氣分があるかないか、自分はかうした弱點に打勝たうとして、どうしても打勝てぬ一人である、生きるならば純な句に生きたい、尠なくとも自個の信仰から生れた句に生きたい、そしてまた周圍を離れて推敲された句に生きたいと絶えず思つて居る。



## 十四　庭に小さな池を堀つて

□

庭に小さな池を堀つた。始め鍬をとつた時には、尠くとも方二間のものにしなければと考へた。そして隣家からシャベルまで借りて來て努力したが、さて堀上つて見ると、長さ一間、幅三尺に足らぬものとなつてしまつた。

□

それは格別木の根や、礫が工事の邪魔になつたと云ふ譯でもない。只半日の間に池らしい體裁を作り、池らしい水を湧かせ、そして緋鯉

や金魚を泳がせて見たいと云ふ希望から、かうした緊縮したものになつてしまつた。所詮は竣工を急いだ罪であつて、自分だけの小さな池が堀れた。

□

其の池の形ちも、始め自分は其場所が東西に長く、南北に狹いところから、寧ろ長方形のものにすべく考へた。そして平凡ではあるが、瓢形こそ適當であらうと思つた。自分は鍬を手にする前に、地面に瓢形の罫を劃して堀り始めたが、さて堀上つて見ると、瓢形にはどうしても見られぬものが出來てしまつた。巨人の足跡と云ふやうな一個の穴、強いて云へば、青踏形とも見るべきものとなつてしまつた。

□

これとても鍬やシャベルの與かつた罪ではない。早く堀らねばならぬ、早く池らしいものを作らねばならぬと、當初の設計を忘れて、無闇と工事を急いだから、かうしたものになつたので、格別不思議はないのである。

□

深さもまたさうだ。始めはせめて六尺は堀り下げる覺悟でかゝつたのだが、堀上つて計つて見ると、僅かに四尺より堀れて居なかつた。竣工と云ふ希望が努力を妨げて、かうした結果を生んだまでだ。

□

凡てに於て始めに考へたものゝ半分にも足らぬものが出來てしまつたのであるが、それでも此池の背ろには小さな築山が築かれ、滿天星や八角金盤が植えられ、貧弱な磯馴が風情を添えた。穴のやうな池もどうやら池らしい風致になる。自分の汗によつて成つた池は、廣くも美くしくも、また更に尊くも思はれる。

□

小さな緋鯉と小さな金魚とが放養された。此池には、更に水草などが添へられた。水面に浮く塵芥や木の葉は、懈らず手網で掬ひとられた。魚の日に〳〵大きくなつて行くのが樂まれる。然し、自分がこゝにさうした享樂を得やうとするには、掌と指の股とに大きな肉刺を忍ばなければならなかつた。

□

凡そ世の中の事は、かうした苦痛と滿足とによつて支配されて居るのであらう。句を作るにしても、始めはかうと思つた事が充分纏まらずに、緊縮したものとなつて表現され、そしてその表現に苦痛と滿足とを認める場合が尠くない。

□

「古池や蛙飛込む水の音」の吟にすら芭蕉はその上五文字に苦しんだそして古池と沈着けば沈着く程、芭蕉は滿足した。芭蕉すらが自己の理想をその儘に表現する事を至難とした。

□

自分の堀つた小さな池と、他の大きな池とは無論何の交渉あるべき道理はない。然し大きな池には大なき鯉や緋鯉が住む、自分の堀つた小さな池には、眼下一尺からの魚は收容されぬ。大きい池は矢張大きい池だけの仕事をする。

□

さう思ふと、この池をもつと大きなものにしたい。尠くとも始めの理想を現實させたいと思ふが、工事に伴ふ汗と肉刺とを思ふと、更に第二の鍬を手にする事が臆劫でならぬ。

□

よしさうした苦痛を忍ぶとしても、一旦體裁をなした山や、周圍の木を堀返して、嚮きの日の勞力を根本から破壞し去ると云ふ事が極めて惜しい。

□

始めに印象した句想は、句作の上からどうしても拭ひ去る事が出來ぬ。

□

小さな池には、小さな魚の外住まぬ。然しその小さな魚も、この池にあつて可也大きな泳ぎ振を見せて居る。島國によく大人臭い子供の出るやうなものかも知れない。其中の最も大きな變鯉などは、殊に王

者の權威が髣髴する。

古來水盈ちて魚躍るで、大きな湖や池の魚は、水が盈ちると水面に浮いて躍るのを常とするが、小さい池の魚は、雨が降つて水が盈れば盈る程底深く沈む。これは周圍の泥水が流れ込んで、水面を濁すからであらう。

□

大陸に生れる詩と、島國に生れる詩とには、何處か理屈でのみ押されぬ軒輊があるやうに考へられる。

□

池の中の鯉が一疋死んだ。子供は掬ひ上げて茱萸の根へ埋めてやつ



た。また一疋死んだ、今度は掬ひ上げたまゝ、土の上に投げ出されてあつた。

□

蛛蜘が他の隅へ網を懸けた。水面に群る蚊を捕捉するには、極めて都合よき高度にあつたが、小さな池にもいつか蛙が住んだ。そして、人の跫音に驚いては、岸から水中へ遯れる度、折角かけた蜘蛛の網を破り〳〵した。第一の蜘蛛はかくして他へ去つた。第二の蜘蛛が來た、同じ場所へ網を張つたが、第一のものよりは高くかけた。蚊を捕捉する事は、第一のものより拙かつたに相違ないが、蛙の破壞から安全に網を保護する事が出來た。

玩具の噴水器を買つて來て、他に新らしい堀井戸の水を灑いだ、糸のやうに細い二條の水が濁つた水面に輪波を描くと、魚は凡て此輪波に集ふて、長い〳〵喩喩も續ける。誘惑の毒手に醉ふやうに、更に復活の曙光に浴したかのやうに！

□

新らしい詩形に生きんとする悶え、これを獲て更に行詰つた惱み、詩人はさうした苦悶の間に内的生活の充實を認める。

## 一五　其角の人格

（其一）

其角と云ふ人物を元祿と云ふ時代から離して見る事は到底出來ぬ。其角は元祿時代に於ける好個の産物であつて、その江戸座の俳調は、元祿の氣分を充分に味はしめるに足りる。

世間では其角を通人として認めて居れば、また天晴の俳人として認めて居るに相違ないが、その人格に於て或は芭蕉に下りはせぬか、今の所謂幇間的俳人たりはしないかと云ふ樣な懷疑に包まれて、自然其句の品位にまで墮落の二字を冠せしめやうとする嫌がある。これは半

面の其角を見て、未だ他の半面の其角を見ぬ落度であらうと思はれる。

其角は成程華美なる元祿の寵兒であつて、而も長く市井の間に人となつたゞけ、一面に於ては確に遊蕩兒であつたかも解らぬ、況や彼は始めから俳句の點料を以て衣食の資に給したゞけ、時の富豪にとり入らねばならぬ場合も多く、隨つて紀文などの幇間の如くに思はれて居たかも知れぬが、彼には拔くべからざる一個の自信があつた。そしてまた自我の發展に對しては、周圍を顧みぬ剛腹な態度があり、更に世間から超越した淸い感念と、極めて豐富な學識と、何人にも愛せらるべき無邪氣とがあつたに相違ない。

自我及自尊剛腹及驕傲、それが何で當時富豪の歡心を得べき態度



であらうか。然し彼には今云つた通り超越した淸い感念と、小兒に等しき無邪氣さとが、この自我とか自尊とか、乃至剛腹とか驕傲とかと能く調和して始めて圓滿な其角を形ちづくつたので、江戸ッ子には曾て稀しからぬ矛盾に生きたのである。

彼が虛栗集の著を公にしたのは僅かに二十三歲に過ぎぬ。其最も彼が放縱の生活を營んだ元祿の時代にあつても、萩の露、蕉尾琴、たれが家、句兄弟、雜談集、末若葉等の著があるところから推しても、彼が俳人としては寧ろ罕なる精力家であることが頷かれる。

其角が如斯き性格の矛盾は明かに彼が個人としての兩面を劃し、彼が學識と才智とは、彼をして長く蕉門十哲の隨一人たらしめた所以で

ある。

されば芭蕉の如きも、彼を門弟としてよりは、寧ろ畏友の如くに扱つて居た形跡がある。尠くとも彼は芭蕉に對して、德川に於ける萩、薩州の地位にあつた。紀文の如きも、また彼に學ぶところが多く其遊里に沈湎しつゝある時だも、なほ彼は豪然紀文の下に下ることをしなかつたらう。

芭蕉に於ける外樣大名たる其角は、家康の秀吉に對するが如きものでなかつた。彼は芭蕉の人格に無上の敬意を拂ひ、そして飽までも自個を卑くして師事した、芭蕉もまた深く之を諒として居たものらしい、かうした云ひ知れぬ味は、當時上下を通じて、陰然社會の各級に流れて居たので、君臣師弟の情誼、その溢れたる表象は、元祿の快擧これを證據立てゝ餘りある。

若し其角が半面に於ける放蕩不賴の幇間的人物であつたとしたら、かの生帳面な芭蕉が、能く彼を待つに賓客の禮を以てする筈もなければ、元祿の快擧に携はつた大高子葉の如き律義一方の武士が、彼を俳句上の師と仰ぎ、個人としては友人として交はらう筈もない。この事はいつか鳴雪先生のお宅へ伺つた時、其角の人物に就いて自分の意見を披瀝したところが、先生も洵に同感であると云はれて、子葉との交誼如何に及ばれた。兎に角其角なる人物が、さうした矛盾によつて生きたが爲めに、世間の誤解を招いたと云ふ事だけは事實であつて、其

兩面を見ざれば、輕々しく其角の人格を論ずる事は出來ぬ。

（其　二）

其角の豐富なる學識、それはまだ彼が源助と稱して居た少年時代に於て、早く儒を當時の碩學寛齋に、醫を草刈某に、詩を大巔和尚に、書を佐玄龍に、畫を英一蝶と云ふやうに、凡てさうした人達に就いて學んだ結晶であつた。これを巧みに融同泡和して產んだものが、即ち彼の俳諧である。小學尋常六年を卒業すると、直ちに俳句に沒頭して宗匠然と構へる今の所謂駈出し俳士とは、少々譯が異ふやうにも思はれる。

如斯き徑路、如斯き博識は、日常生活の上に於て勢ひ彼を驕傲ならしめねば置かぬ。それと同時にまた彼をして一種の犯すべからざる風骨を養はしめた。

彼は齡僅かに二十有餘既に宗匠として、江戸座俳調の端を拓いたゞけ、自尊は彼をして年よりは老成せしめ、亦彼をして努力せしめた。彼が壯時よりいかによく人に下らなかつたかは、俳家奇人談の一節これを證據立てゝ居る、即ち其一節を摘錄すれば、

（前略）貞享中照降町へ居を移す、破笠が記に嵐雪と共に同居せりと載せたるも此頃なり、或方より一卷の點取を遣す、便ち開き見、使へ返して曰く、此卷餘り初心なり、我附墨を勞するに及ばず、連中の先輩に談ずべしと、使是非なく卷を受取り、扨點料も返してんや

と云ふ、答へて料は見賃に收め置くなりと云々。

而して同書著者玄々一は更に彼が此行爲を評して「今時の人その德もなく、其力もなく、叨りに古人の洒落に擬し、風雅を鬻ぐに甲乙を立つると同日の談ならんや」と斷ず。

貞享年中と云へば、彼が齡未だ三十に達せざる當時であるから、嵐雪と同居したりと云ふ破笠の證言も、强ち據なしとも云はれぬ。そして若し果して嵐雪と同棲したとならば、嵐雪の家に彼が同居したか乃至は合宿自炊と云ふやうな生活を營んだか二者其一に居らねばならぬので、兎に角嵐雪が其角の家に同居を申込んだとは請取れぬ。そして彼はさうした貧弱な生活を營んで居ながらもなほ酒と云ふものから



離れる事が出來なかつたものらしい、場合が既にさうである、初心の一卷にも點朱して、敢て貪らずとも、相當の朱料をとるべきが本來でもあり、また將來榮達の緒でもあるのだが、彼が熱烈なる自尊心は、かゝる商賣氣を出すことを頭から許さなかつた。そして點料は鑑定料として收めてしまつた。これとても彼は鑑定料によつて、その一卷に「初心」の判決を與へたる報酬として當然收むべきものと信じたからだ。敢て生活の資に供しやうとか、酒の料にしやうなどゝ云ふやうなそんなさもしい、汚ない心から出た譯では決してない。其處に其角の面目もあれば、情味もある。彼は要するに純なる江戸の空氣に生きたゞけ、他人の誤解、忖度、揣摩、そんな事には且て顧慮せぬ。自個の

信ずる所は、信ずるまゝに忌憚なく行つた。五元集を見ると、彼は自からかう云ふことを書いて居る。

七十餘の老醫みまかりて、弟子どもこぞりて泣くまゝ、予に追善の句を乞ひける、その老醫のいまそかりける時、更に見知れる人にもあらず、哀れにも思ひよらずして、古來稀なる年にこそなど云へど兎角許さざりければ、

六尺も力おとしや五月雨

醫者が死んで追善の句を彼に乞ひに來たが、見ず知らずの人に追善の句がやられるものかと、斷然撥ねつけた彼の態度、それから無理に强ゐられて、澁々「六尺も力おとしや」と同情の淺い句を平氣で與へた彼の自信「更に見知れる人にもあらず、哀れにも思ひよらず」と忌憚なく前書した勇氣、それ等は彼の生活、彼の榮達の上に、俗世間から多大の支障を與へたに相違ないが、彼は生涯を通じて、さうした支障によつて、自個の生活や榮進やが緊縮されつゝあつたと云ふことには恐らくは心づかなかつたであらう。赤裸々の彼には、不絶赤裸々の心が光つて居たからだ。

（其　三）

想像ではあるが、揣摩ではあるが……抱一が描いた彼の肖像を見ても譯る、彼其角はでつぷりと能く肥えた脂肪質の男で、現代に於てはよく會社の重役などにありさうな體質を有して居たけれども、彼

にはがつしりした膽汁質のところも見られなければ、また何處か不得要領な粘液質らしいところもない、實際見たところから心持のよい肥り方である、從つて彼の生涯は膽汁質の人の如くに功利を急ぎもしなければ、粘液質の人のやうに不得要領にも了りもしない。

彼は彼の生涯を通じて、多く其本能を枉げ、極り切つた虚僞の道德の上に自分を置かうとしなかつた。無論人道を外れた事はしなかつたに相違ないが、敢て杓子定規の道德に自個を拘束しやうとはしなかつた。

それだから彼は屢々他人から誤解される事もあつた。芭蕉からも訓誡を受けた事は二度や三度にとゞまらなかつた。



俳諧世說と云ふ書物の中にも、其角は芭蕉からかうした訓誡を受けそして其道理には服しながらも、猶且つその訓誡の果して正當であるか否かを疑ふて居る形跡がある。事實は極めてつまらぬ事であるが芭蕉と其角との性格の相違、及び芭蕉と其角との坐臥常住に推して、頗る面白い對照であらうと思ふ。

芭蕉はよく露沾公の俳席に侍した、其角もまた芭蕉に伴はれて露沾公の館に行き〳〵した。露沾公は大名である。隨分我儘も多かつたに相違ないが、芭蕉はこれに對して、何等の介意も、蟠りもなかつた。そして彼は殆ど侍講の地位にあつたけれども、其角は芭蕉の愼ましやかな態度を寧ろ慊らずとなした。また彼が露沾公の俳席に連る事は、

八五郎が赤井御門守樣へ伺候したよりも、より以上の窮屈を感ずるところであつた。

露沾公は自己の禁煙は更なり、他人の喫煙すら好まれなかつたので芭蕉も遠慮して其俳席のみは禁煙した、かうした事が其角には諂のやうにも見えた。

一日芭蕉と露沾公の俳席に招かれて翁の庵へ歸りついた時に、其角はかう芭蕉を矯めた。

『それ滑稽は酒落風流をもて本意とするやうに承つたが、もしさうとすれば威權にも怕るべからず、高位にも屈せざるが俳人の道でござらう、さるを先生が内藤公の俳席でのみ喫煙し給はぬは、諂にも似



たりと申さんか、御意見あらば承はりたいものでござる！』

半ば芭蕉を恨み顏であつたが、其時芭蕉の態度がいかに彼其角に對して森嚴であつたか。

『笑止やな、卿、其疑は俳諧を何の爲にすると云ふ事すら辨へぬ徒の云ふ事ぞ、それ俳諧は小技なりと雖も、用ゆるところは一道の外ござらぬ。さらば風流諧謔の中と雖も苟くも禮節を忘れてはなり申さぬ、法を破るを以て洒落となすは桀紂の徒、また繁を省いて風流を覺へたるは頑愚の俗ござる。內藤公の雅莚に煙草を禁じたるは諂にはあらず禮と云ふものござるよ。何となれば我等一介の乞丐に類せる輩が、假りにも風雅の道に遊び、塵尾を握つて宗匠の潛名を天

下に許され、一國一城の露沾公の膝近く侍りて談笑の自由を蒙るはこれ畢竟俳諧の德ござる。然らば貴人のお側にて其忌嫌ひ給ふ事を遠慮するは人道の然らしむるところではござらぬか！』

孔孟の說を根據として、淳々說くところがあつたと云ふ、如斯く謹嚴な芭蕉と、寧ろ放縱な彼其角と提携したと云ふ事は、鳥渡奇蹟のやうにも見受けられるが實はかうした輕輕、かうした相違によつた、情味ある師弟の關係が、一層深く結ばれて居たのである。

（其　四）

芭蕉の平常は、既に其居を江東深川に卜せるだけ思切つて幽雅閑寂を旨とし、寧ろ僧房化した生活であつたに相違ないが、其角はこれに反して廣く實社會と接觸し、紅塵萬丈の間にその江戸座なる俳想を捉へんとした。

彼の居は所謂江戸下町の中心にあつた、そして彼の周圍には紀文とか、英一蝶とか、子葉とか云ふ樣に、雜多な階級があり、雜多な色彩があつた。彼の氣分は常に緊張し、彼の行爲はまた常に俗化せざるを得なかつた。

當時の俗世間を訓致誘導する芭蕉の俳想と當時の實社會に迎合融和せる其角の俳調とは、眞に當時に於ける俳壇の偉觀であつたであらう其角は其師芭蕉によつて、神秘的俳想の眞髓を窺ひ、芭蕉は其角を通じて實社會の氣分、俗世間の傾向を探知するを得た。

芭蕉と其角との間には、その性格に於て、また其平常に於て、如斯き相違があり、如斯軒輊がある以上、その嗜好に於てもまた全然異つて居た。芭蕉は山海の珍味よりは寧ろ一握の麥飯に多大の趣味を感じ一壺の美酒よりは一椀の澁茶に舌皷をうつと云ふ樣に、極めて酒食の奢を遠ざけ、肉の觸感の上にもまた絶大の緊縛を加へて、凡てこれを俳諧の本義とした傾向があるに反して、其角は隨分と酒食の上に華美を竟め、從つて肉の觸感も自由に任せて曾て顧るやうなことはなかつた。

それは彼が實社會との交渉上、止むを得ざるものがあつたに相違ないが、彼の體質上尠くとも、芭蕉の如き簡易生活は無理であつたかも知れない。そこへもつて來て彼は時の富豪に誘はれては、よく遊里へ行き〳〵した。耽溺とまでに及ばずとも、さうした事が勢ひ彼をして美的生活を憧憬せしめねば置かなかつた。

彼が酒を好むと云ふ一事は、彼の天賦であつたらしい、彼は彼の青年時代、まだ一家を爲さぬ時分から、早く酒に親んで居た。そしてその酒量は彼が遊里に出入しつゝある當時に於て、最高潮に達した。

芭蕉も彼其角の飲酒は天賦であると云ふ事はよく知つて居た。けれども屢々其度を失するに及んでは彼が身體の疲勞、俳諧に對する努力の缺乏などを杞憂すると、默つて居る譯にはどうしても行かなかつた彼は遂に飲酒一枚起請なるものを謄寫して、其角の頂門に一針を加へ

て見た。

唐土我朝に、もろ〳〵の上戸達の、沙汰し申さるゝ酒盛にもあらず又かちんを食ひ、茶を飲みて呑める酒にもあらず、只往生極樂の爲には、南無阿彌陀佛と申て、疑ひなく往生すると思ひとりて、一杯飲むより外、別の仔細は候はず、但三献四種の肴など申事の候は酒宴を決定して、珍らしき酒肴求めたると、思ふうちにこもり候なり、此外に奥深き大盃は、一尊の御憫みにはづれ、本性失ひ候はんを、愛せん人、たとへ一代の法の學ばずとも、一文不知愚鈍の身になして下戸にも常にふるまはせて、唯一向に酒を呑むべし。

右飲酒一枚起請は、尊朝親王御作の由承り候、尤さる人の許に



は眞筆にて掛物にして床に掛り有之候。餘り面白き御作故、ちと寫し來り候。貴丈常に大酒をせられ候故此御文句を寫して、大酒は御無用に存じ候。仍一句、

朝顔に我は飯くふ男かな

如何、委しき事は頓て御目にかゝり、萬々可申述候。以上

眞綿で首の意見とは之である。彼其角も此柔かい訓誡に對しては反抗の餘地がなかつたであらう。頭から酒を慎めと云はれるよりも、「朝顔に我は飯くふ」と諷刺された一句、其角には嘸辛かつた事であらう。

（其五）

其角の平常は、爾く師の芭蕉と異つて居たに相違ないが、彼の句作

に對する見解は、芭蕉と合致して居た。それは彼の著俳諧錦繡緞に、

「或師の云、利久の茶の湯にあひて、事を好む輩、其折ふしの道具どもを、是は古し、是は新しなどゝ、目をはりて褒め合ひければ、利久さん〳〵不興にて、新古の目きゝは、商人にこそよれ、道を好む輩はたとへ欠摺鉢なりとも、時によろしく、茶の湯に用ふると、用ひられざるとの堺を辨へて、物數寄を褒むべきなりとありしとかや、俳諧も左の如し、句は道具なり、點はあき人なり、俳諧過ぎての點なれば、其席に交はりて、是は長し是は丸し珍重などゝ點にあてゝ目利せらるべきは本意なるまじくや、打越のむづかしき所か、席のしぶりたる時に宜しく付流したるは、たとへ無點の句なりとも是用なり、點者の心を兼て、句毎にあらぬ巧みをめぐらし、人の前句を奪合などせんは、無下に口惜しき働きなり云々」と誌して居るを見ても解る。

かうした合致、かうした見識、それによつて芭蕉との間もしつくりと結びつき、芭蕉も又彼に對して蕉門十哲中の第一位なる事を默認して居たものであらう。然るに後の江戸座の宗匠なる者が、さうした其角の精神や見識や、立派な格言の存在を忘れて、卑しい點式の上に、所謂あき人の目きゝを專らにし、遂に江戸座の俳諧をして墮落せしめたのみならず、其角の名聲まで辱かしむるに至つたのはいかにも殘念な事と思ふ。

彼其角が酒の爲めに屢々句を忘れたと云ふやうな事が、何にかの書

物に書いてあつたやうに記臆するが、それは彼がたま〳〵酒席に沈湎したやうな場合、人の句を白扇に乞ふがまゝに、放奔の筆を揮はうとして、其何の句を染むべきかに迷ひ、揮毫を中止したとか云ふやうな極めて罪のない、刹那の陷缺を、業々しく筆にしたものに相違ないので、其角が句に對して、如何に忠實に、如何に亦眞面目であつたかは右の一文を見ても直ちに首肯し得られるであらう。

其角が世間から誤解され易き、矛盾せる個性の伸展は、句に對する上のみではなかつた。既に彼が遊里に耽溺しつゝある場合にも、彼は純然たる放蕩兒にはなり得なかつた。彼は客ともつかず、取卷ともつかず、況や情人ともつかず、寞然とした遊びに泥んで居た。彼には伊左衞門となるべき弱い影も見られなければ、亦忠兵衞のやうな狂熱的發作も見られなかつた。要するに彼の遊びとしては、洵に平々凡々なものであつたらしい。

それであるから社交上に對しても、此矛盾はどうしても伴はねばならぬ。かの七十になる老醫が逝去して、其追悼の句を乞ひに來た者に對し、知らぬ人に追悼の句は吟まれぬと謝絶したり、それでもと云はれて「六尺も力落しや五月雨」と云ふやうな、涙のない句を贈つたりした事が、一面に於て、彼の同情も疑はれ、彼の冷たい心の底も想はれるやうであるが、一面に於て、彼は非常に涙脆い、同情心に富んだ寧ろ感傷的の事實も、決して尠くない。彼が其慈父を亡なひ其慈父を

葬つた時の悲痛、それは尋常一様の痛恨でなかつた。彼が當時の獨吟に序して「亡父葬送の場にて、崩心の悲しみを懷きて、四生の起別を知る」と云つて居るに徴しても、その人情に厚かつた事が表白されもすれば、又一方に點料をのみ沒收して、選句を貶けたと云ふやうな逸事があるかと思ふと、乞食の句を選して、奥書まで與へて居るに至つては、確かに彼が個性の伸展による矛盾とより見るの外はない。此乞食に奥書を與へた一事は、また彼自から五元集に書いて居る。

三藏と云ひけるかたひの者、つゞれたる袋より、俳諧の歌仙取出して、點願はしき由を申て去りぬ。その卷の前書に、爰にいやしき土の車の、村の陰に身をかなしめるあり、と書けり。いかなる者のなれるはてにかありけむ、かの卷の奥に申遣はしける。

あまさがる非人貴し麻蓬　其角

かうした矛盾は、金の切離れに器用な人が、他の一方に於て義理を缺いて居るやうな、そんな淺薄な矛盾では決してない。彼が感情の發作は、屢々彼の理智を奪ふやうな事もあつたに相違ないが、其結果から觀察すると、凡て人道に適合した矛盾であつて、感情に奪はれたと見える理智が、其奥になほ煌たる光りを放つて居る事が知れる。面識なき他人の死に冷かに慈父の死に厚いと云ふ事も、富人の選句を貶けて貧者の卷に奥書したと云ふ事も、普通人間の行爲として、格別怪しむに足らぬところであらうが、只それが初めからそうした理智とか、そ

うした主義とかの下に表現されず、反つて感情の發作から來つた事件が、その解決の理智、人道に歸すると云ふ上に、面白い其角の面目が見られるのだ。

（其　六）

如上大概其角の人格は朧ろ氣ながら傳へる事が出來たと思ふが、未だ一つ彼の眞面目の態度から發露する滑稽的趣味性に就いて、書き漏して居るやうにも思ふ。

其角は前にも云つたやうに、感情の發作から來る事件に對して、大なる矛盾があつた。此矛盾に伴ふ彼の滑稽は、隨分とその面目を發揮したが、それがまた決して故意らしいものではなかつた。

彼の眞面目なる態度から生れる頓才は別としても、彼が天賦の滑稽には、流石嚴格な師の芭蕉も屢々失笑を禁ずる事が出來なかつた。

現に芭蕉が終焉に臨んでも、彼は其角の爲めに、その重態の苦痛から數分間免れ得たのであつた。しかもそれは其角の決して自覺せぬ稽の恩澤であつた。

此事は嚮に沼波瓊音氏がその著「芭蕉の終焉」に書かれたと思ふが今これを其角の側から書いて見るとかうである。其角が偶然にも師芭蕉が難波にあると聞いたのは、元祿七年十月十一日であつて、實に其終焉の前日であつた。芭蕉病んで難波にありとだけは人傳に聞いたであらうが、さうまで重態であらうとは思もかけなかつたものらしい、俳

諧錦繡緞の住吉奉納の句を誌した後に、

十月十一日芭蕉難波に逗留のよし聞えければ、人々にもれて、彼旅宅にたづねまゐるゆゑ、吟行中ばに止む。

と書いて居るに徴しても、また花屋日記にも、

十月十一日朝たま〳〵時雨す、思ひがけなく東武の其角來る。伊勢參宮の序、和州紀州を遍歴して、泉州より浪華に入り、初て翁の病を聞き、其處此處尋ね廻りて、馳參じたるなりと。病床にて對面し皮骨連立の體を見て、且つ愁ひ、且つ喜ぶ。師は言葉なくて、唯々落涙するのみ。

と誌して居るに見ても、その寧ろ偶然である事が證據立てられて居る。



閑話休題、彼其角は兎も角もかうして芭蕉を見舞ひ、その所謂皮骨連立の體を見て驚くと同時に、非常に師の病痾を愁ひ、そしてまた今日の對面を旻天に感謝した。が、花屋日記は更につけ加へて云ふ、

此日蠅の多く、日南に群がり居たるを、人々竊にてさし取るに、上手、下手あるを見て興に入る。夜に入り粥を望ませらる。次郎兵衞疾く焚きて進らす、一日以來の食事なり、土鍋の殘粥は去來頂きて云々〳〵。

其角が眞面目の態度から發露する滑稽は、實に此時に於て活躍した。芭蕉の寢て居る枕頭と云はず、看護の人々の肩と云はず、膝と云はず小春の蠅はうるさく纏はつた。今ならば蠅取器とも云ふべきであるが

其時代さうした利器は見つからなかつた。看護の人々は箸や竹に　竊をつけて一疋々々蠅を追廻したが、日記にもあるやうに、それには上手と下手とがあつたに相違ない。

其下手の仲間の中に其角が居た。誰でもさうであるが、取込の中へ不要意に飛込んだ程手持無沙汰のものはない。芭蕉の看護には既に去來も居る、惟然も居る、正秀も居る、支考も居れば、乙州も居る。粥を薦めたり、便の世話をする人に些の不便を感ぜぬ。かうした場所へ來た其角は、只坐つて居る譯にも行かずと云つて、格別これと云ふ用はない。蠅取こそ彼にとつては當坐の無聊を償ふべき唯一の仕事である。

彼は其肥滿した體軀を起して、無器用な手に蠅取竊をもつた。そして座敷中躄り廻つたが、彼が活動と比較して、獲物は極めて尠かつた。もつたて尻をして竊の手を延ばすと、蠅は彼を嘲るやうに啼いて飛んだ。鈍い活動を辛抱强くつゞける大きな其角と、敏捷な羽をもつて、盛に飛廻る小さな蠅との對照が、どんなに滑稽であつたであらう。その夜惟然と正秀とが故らに師を慰めんとして、

ひつ張りて蒲團に寒き笑かな　惟然

おもひよる夜伽もしたし冬籠　正秀

と咏むだ諧謔よりは、より自然の滑稽に芭蕉は頤を解いたであらう。其角は矛盾に生き、そしてまたかうした自然の滑稽に生きた。蕉門

十哲の隨一人として、當時の俳壇に鳴つたのも、一つはその人格に基くところがあつたからだ。蕪村は其角の全集中、その二三句を除いては殆ど見るに足るものなしと喝破したが、彼の句に於ては、自分もまた多少の疑問がある。俳句としての價値はどうだらうかとも考へる。けれども元祿の俳壇からこの偉大なる其角を逸したく思はぬ。いつまでもさうした人格の男として其角を尊重したい。

南柯俳話 終

大正五年十月二十三日印刷
大正五年十月二十六日發行

著作者　內藤鳴雪
　　武田鶯塘

發行者　東京市赤坂區青山南町二丁目廿七番地
　　伊藤美太郎

印刷者　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
　　鈴木章司

印刷所　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
　　中屋印刷所

發行所　東京市赤坂區青山南町二丁目廿七番地
　　雲泉堂
　　振替口座東京一一一五〇番

定價金七拾五錢

（不許複製）

經濟新聞社長 大井誠之助君著　中泉伊藤美太郎君著

# 株式投機の手引

四六版洋裝頗美本　定價一圓四十錢　郵稅八錢

株式界の狂熱時代來る。此機會に乘じて斯界の覇者たらんとせば、一に斯界の事情に精通し其實際的智識を有せざるべからず。然も從來刊行せられたる者たるや、或者は學理に偏し或者は通俗に流れて未よく局外者をして一讀斯界の事情を了解せしむるの書なきは吾人の最も遺憾とする所なり。本書は東京株式仲買店北商店にありて斯業に從事する事多年、よく表裏の事情に通曉せる著者が、其豫備知識を與ふべく通俗平易を旨として著述せられしものなれば一讀直に斯界の事情を体得すると共にこれを實際に應用すれば、必ずや斯界の優勝者たるを得ん

## 刻下必讀の書

發行所　東京青山南町二の二七　振替東京一一五〇番　雲泉堂書店

金々先生著　まこと畫伯裝幀

新奇妙案

# 誰にも出來る金儲

四六版美裝　二百廿餘頁　定價五拾錢　郵税六錢也

苟も當世金儲に志あるの士は讀め！。金々先生曩に東京やまと新聞紙上に當流金儲談義を書き、其の奇才は都下に喧傳す。本書は這般先生が新に考案せる何人にも容易に實行の出來る金儲を實地につき親切に說きたるものにして、內容列記するまでもなし。

發行所　東京青山南町二の廿七　振替東京一一一五〇番　雲泉堂書店

金々先生著

# 近頃儲かる商賣百種

四六版美裝　二百七十頁　定價六十五錢　郵税六錢

世の中が進歩するに連れて、商賣の數も增へて來る。昔の「商賣往來」の著者が今の世の中を見たら、其の種類の多いのに面喰ふだらう。澤山の商賣の中には、表面は儲かりさうで居つて內實に這入つて見ると、案外儲からないものもあるが、更に人の氣付かないで、意外な儲けにホクついて居るのもある。其所で金々先生は、近頃時世に適切で、直に實地實行の出來る商賣で、其の內幕から遣繰りを書いたのが本書である。目次の二三を左に摘記せやうならば、

確かで有利な荒物屋—芝居の出方の其の收入—一風變つた蛇商賣—資本要らずの鳥餌拾ひ—釣魚師相手の餌商賣—竹屋と竹の皮屋—犬猫相手の家畜病院—手腕を要する結婚屋—露店の氷屋—謄寫屋の筆耕業—倍も儲かる飲食露店—一類の尠い筆幇商—煙管の羅宇屋生活—輸出向の更紗業—一種特別の養鼈業—折箱の製造業—小兒相手の玩具商—以下四十五種

發行所　東京青山南町二ノ廿七　振替東京一一一五〇番　雲泉堂書店

## 天下豈に斯くの如く至廉なる書籍ありやゝ？

小國民文庫は最も進歩せる印刷術を應用せるが故に價廉く印刷鮮明體裁優美にして少年諸君の札上を飾るに恰好なり小國民文庫は世上百般の事物に就き特に少年諸君の爲め諸大家の執筆する所たるを以て家庭の讀物として推賞するに足る小國民文庫は五冊を以て一輯とし各冊六十四頁にて口繪挿繪あり、而して美裝せる箱に入れて定價十錢なり。乞ふ試みに一本を購ひ其の至廉なるを知り給へ小國民文庫は其の第一卷として我が皇室の如何に尊嚴にて神聖なるかを知らしめんが爲めに此所に皇室の卷を發行せり。

# 小國民文庫

全五卷

■定價金十錢■郵税四錢■切手代用差支なし

### 本書の内容

歴代天皇と御即位　神武天皇橿原宮に於て御即位あらせられてより大化革新に及び戰國時代より明治天皇に至る歴代の御即位を詳述す。

三種の神器　我國の皇位さ離る可らさる三種の神器の御由來を說いて壽永元弘の亂竝に南北朝時代に於ける御動座并御變動を詳述す。

即位禮と大嘗祭　明治天皇の御制定あらせられたる皇室典範登極令に依り天皇御一代に於ける最も大切なる儀式を至極平易に謹述せり。

今上陛下の御盛德　允文允武なる今上天皇陛下の御平生竝に御盛德を謹記し奉りて大御心の高く而して深き事共をば記し奉りたるものなり。

竹の園生の榮　九重の雲いや深き御空に輝かせ給ふ金枝玉菊のやんごとなき方々の御來歴と御平生を十四篇に亘りて謹記し奉れるもの。

東京市麻布区青山北町七丁目二番地　青山書房發兌

71
598

終